

[特別企画2]

献血バスでの献血再来カード導入による成
分献血者数増加に向けた取り組み

久保尚美, 奥村春香, 南 香織, 山下千代美, 米山幸江, 和合明子,
内門悦子, 大原律子, 岩切栄子, 上床勇揮, 田上公威, 竹原哲彦
鹿児島県赤十字血液センター

【背景および目的】

全国献血血液確保量における輸血用血液は2015年度108万Lに対して、2019年度101万Lとほぼ変わらない。しかし、原料用血液は2015年度91万Lに対して、2019年度112万Lと増加しており、今後も原料血漿必要量の増加が見込まれる。

鹿児島県赤十字血液センター献血目標数における全献血は2017年度48,446人、2018年度48,454人、2019年度49,047人とほぼ横ばい状態であるが、成分献血は2017年度10,893人、2018年度14,045人、2019年度15,710人と増加している。成分献血のうち、血小板献血は2017年度9,111人、2018年度10,123人、2019年度8,755人と横ばい状態だが、血漿献血は2017年度1,782人、2018年度3,922人、2019年度6,955人と大幅に増加している。しかし2カ所の固定施設、「献血プラザかもいけクロス(以下かもいけど略す)」と「献血ルーム・天文館(以下天文館と略す)」の成分献血1ベッド稼働率は、2015年度全国3.1人、かもいけ1.6人、天文館1.9人、2016年度全国3.2人、かもいけ2.1人、天文館2.2人、2017年度全国3.0人、かもいけ2.4人、天文館2.7人と全国平均をかなり下回っている。このような状況で、分割血小板、原料血漿採取量の計画増加に対応するには、採血現場での声掛けやさらなる成分献血者確保の強化が必要であった。従来から、次回の献血に繋がるよう本採血中に看護師から献血バス会場に限定して来場する400mL献血者を対象に成分献血の声掛けを行っていたが、手順・成果が明確でなかった。

そこで成分献血目標の増加に対応するため、2018年4月から「献血再来カード(以下カードと略す)」を作成・配付し取り組みを行った。

【対象および方法】

対象は、献血バスで400mL献血された献血者とし、実施期間は2018年4月7日～2019年3月31日とした。

方法は、1. カード(図1)を作成し、カードの表には固定施設名と記念品交換期間、裏には献血者名と配付した看護師名を記入する欄を設けた。献血カードと一緒に持参できるようサイズを統一した。2. 検査データ・血管の状態・副作用履歴等から、次回固定施設での成分献血に繋がると判断した献血者にカードを配付した。3. カードを持参し、固定施設へ成分献血目的で来所された献血者に記念品を渡した。4. カード配付数とカード持参の再来者数を把握した。5. カード配付前後の2017年度と2018年度の年間再来者数を比較した。

【結果】

献血バスから、初めて固定施設へ来所された年間再来者数は、2016年度146人、2017年度183人に対して、2018年度は277人と大幅に増加した。

カードを持参し固定施設へ来所された献血者は74人であった。そのうち現在2回目以降も継続している献血者が38人、延べ献血回数は153回にも及ぶ(図2)。

2018年6月から2019年6月の1年間で最初にカードを持参し固定施設に来所された献血者は、



図1 献血再来カード

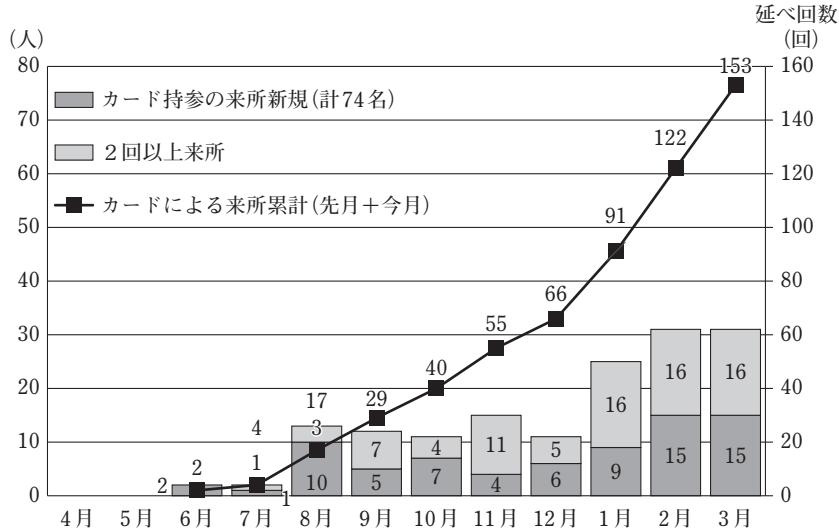


図2 再来者数

1回来所18人、2回来所22人、3回来所10人、4回以上来所24人と継続して来所している。

血小板献血者数は2017年度10,353人から2018年度10,306人と変化はみられなかったが、分割採血者数は2017年度3,610人から4,134人と増加した。血漿献血者数も2017年度2,520人から

2018年度4,664人、血漿確保量も2017年度1,381Lから2018年度2,556Lと大きく増加した。2018年度成分献血1ベッド平均稼働率は、全国3.2人に対して、かもいけ3.4人、天文館3.1人と大きな改善がみられた。

【考 察】

カードを作成し固定施設への声掛けを行ったことで、手順や成果が明確となり看護師の意識向上に繋がり配付数は徐々に増加した。8月からは献血回数に関わらず初回者にも配付し対象者を拡大した。9月からはバスから帰着後、週間採血計画表にカード配付数を記入する欄を設けた。これにより看護師間で情報を共有しやすくなり配付数が増加したと考える。10月から12月は街頭献血が多く対象者が多かったため、配付数の増加に繋がったと考えている。従来の声掛けに加えて、カードを配付し次回の献血をお願いすることで、固定施設への来所を促すきっかけとなったと考える。

献血者からは「血管や検査データを褒められた。成分献血の声掛けをしてくれて嬉しい」等の声がきかれた。看護師による多面的観点から成分献血に適していると判断した献血者への声掛けが、成分献血への理解度を増し継続した献血への意識付けに効果的だったと思う。

取り組みを通して看護師からは、カードに看護師名を記入することで配付者が明確に把握できるため「カードを渡した人が来てくれた」「自分がカードを配った人は来ましたか」等の声が聞かれた。また、週間採血計画表にカード配付数を記入する欄を設け配付数が明確になったことで「他のバスは何枚配っているかな」と意欲の向上に繋がった。

また、若年層の新規献血者と複数回献血者の確保に向けた新たな取り組みとして、ラップラッド登録の推進を始めている。受付ファイルにラップラッド登録説明用紙を入れ待ち時間に見ていただき、採血中に看護師が声を掛け登録を勧めている。献血者からは「受付の待ち時間に見れるので良い」「翌日には検査結果が分かる」「ネットで気軽に予約ができる」等の声が聞かれた。

今後は、カードに記載している内容を再検討し、さらなる新規成分献血者数の増加に努めていきたい。

参考文献

- 1) 鹿児島県赤十字血液センター事業年報 (Vol.31 ~ 33)